平成24年度　落合高等学校進路課通信　（普通科版）

風の階段 踏みしめて　～ 自己実現へ向かう道 ～

第 31 号　平成 24 年 12 月 6 日（木）発行

「爆発力」　～ スピードスケート選手　加藤条治の「爆発力」復活の記事から ～

「学習力」の定着と成果として、「爆発力」の獲得を挙げたが、先の学習実態調査では、その傾向が見られず、受験学力の獲得にやや難があることを示した。

標題のとおり、スポーツ分野の国内トップ選手の例が、そのままあてはまるわけではないかもしれないが、つまるところは、基礎・基本、応用と「爆発力」の発露がどうか、ということだ。

加藤選手は、昨季は成績不振で、いいときの滑りを元に足の角度や位置などの細かい技術をつきつめようとし、結果的に滑りが安定しなかった。今年は、理論ばかりでなく、直感や昔の感覚を取り戻すことに余念がなかった。今大会「全日本距離別選手権」では、「力が抜けた」という。

要するに、「感覚」的に「自由」に滑る。もちろん理論や基礎・基本抜きの「爆発力」はありえず、時間を要するが、究極は「感覚」であろう。

「学習」に向かうとき、また「就職」に向かうときも、こだわりを持ちつつ、むしろ「感覚」的なレベルで、立ち向かう境地でありたい。この時にこそ、「爆発力」を伴うのだろう。

さて、日本武道に関わり、「守」「破」「離」という有名な言葉がある。

「守」…まずは決められたとおりの動き、つまり形を忠実に守ること。
「破」…「守」で学んだ基本に、自分なりの応用を加える。
「離」…形にとらわれない自由な境地に至る。
加藤選手などは、「離」まで至った例だろう。

それがかなわない私たちは、どうしたらよいだろう。

こんな高い境地でなくてもよいから、自分なりの応用を加えたい。自分なりの「自由」な境地に至りたい。難しく考えなければ、つまりは、「このことが好きでたまらない。」「このことなら、人にも負けない。」「これなら一生続けていける自信がある。」ということでいいのではないか。

多分に「感覚」的であって十分よい、と思ったわけである。

◇ちなみに、先日（11/29（木））は筆者の結婚記念日であった。私事ではあるが 14 周年である。

指輪の裏に彫った文字を見返してみた。「reliance」という英文字だ。「信頼」という意味だ。ただ、「trust」（自身が肩に力を入れての「信頼」）とは違う。むしろ、人との関係性を頼りにし、頼りつつ相手に感謝すること、と私は捉えている。むしろ、その方が長続きするかもしれない。「依存」という訳もある。妻には甘えつつ、力を発揮すべき時はいつか、自覚しているつもりだ。

だから、あえて「reliance」とした。あえて「力を抜き」、「力を尽くす」のだ。

受験も同じ。周囲の関係するすべての人達にひたすら感謝しながら、力を尽くすのだ。

先日は、妻に花でもと、石川啄木よろしく買って帰った。子どもたちをかなり強く抱きしめた。

…「力が抜ける」ような話で申し訳なく思う。でも筆者自身には、「力の出る」話でもあった。

□**センター試験まであと 44 日**（こうなったら、いい意味で「感覚」的に力をつくせばどうか！）

【その後の加藤条治選手の活躍】　※一時期、低迷もあったが…

条治、５００で連日の１位「実力持っていると証明できた」

＝スピードスケート世界スプリント選手権第２日　（1 月 27 日　米ソルトレークシティー）

（記事内容詳細）

男子５００メートルで１位の加藤条治

男子５００メートルで加藤条治（日本電産サンキョー）は前日出した日本記録に０秒０８届かなかったが、３４秒２９で連日の１位となった。総合はミヘル・ムルダー（オランダ）が１３６・７９０点の世界記録を更新し初優勝。日本勢は羽賀亮平（日本電産サンキョー）が１３８・６５５点で２０位。長島圭一郎（日本電産サンキョー）は２１位、１０００メートルで２２位に終わった加藤は２２位だった。女子は住吉都（堀技研工業）が５００メートルで小平奈緒（相沢病院）の日本記録に０秒０７と迫る３７秒４９で７位、１０００メートルは１分１４秒６６で１１位となり、１５０・６８０点で総合１３位。小平は１０００メートルは転倒し、総合２２位に沈んだ。

加藤は日本新記録を樹立した前日に続き、好タイムをマーク。２位との差は前日が０秒２２、この日が０秒２１と、大差の勝利を連発したエースは「久しぶりにこういう勝ち方をしてすっきり。実力を持っていると証明できたのは収穫」と笑みが絶えなかった。

実力が大きく劣る米国選手と同走し、これが速さを際立たせた。外側のコースからスタートし、第１カーブの出口で早くも内側の相手を抜き去る珍しい展開に。通常は相手の背中を追って加速するバックストレートで相手を置き去りにした。課題の最終カーブは出口で大きく膨らんだが、スピードに乗っていた証拠。「きれいに回れた。減速が少なかった」と納得顔。

持ち味だった一発の**爆発力**は、２レースの合計タイムで争う五輪に向けて不安材料でもあった。

今季はW杯で２回とも好タイムを出す大会が目立つ。緻密な体調管理で狙った大会にピークを合わせられるようになり速さに安定感が加わった。それでも「理想はもっと上」という。「状態がうまく合えばこうやって頭一つ抜けたタイムで勝てる」。**求める究極の強さ**に一歩近づく圧勝劇だった。

［ 2013 年 1 月 29 日　06:00 ］